

研究計画書

研究計画書の提出日 2025 年 6 月 24 日

研究者氏名、研究者の所属部署、共同研究者氏名、共同研究者の所属部署

<研究者>

加藤怜子 袋井市立聖隷袋井市民病院 看護部 3 階病棟

<共同研究者>

秋山友喜美 袋井市立聖隷袋井市民病院 看護部 3 階病棟

渡邊真智子 袋井市立聖隷袋井市民病院 看護部 3 階病棟

研究テーマ

看護を語るカンファレンスが身体拘束をしない文化を醸成する

研究の背景・意義

令和 6 年度の診療報酬改定において、身体的拘束を最小化する取り組みの強化が規定され、医療機関において、組織的に身体的拘束を最小化する体制整備が必須となった。

A 病棟は、回復期リハビリテーション病棟（以下回りハ病棟）である。身体機能の評価や退院支援の状況は多職種カンファレンスで現状の共有や問題点の検討を行っている。2024 年度は、看護上の問題点に着目し、看護チームで行う「看護カンファレンス」に力を入れた。看護カンファレンスでは、身体拘束に着目し検討することもあり、年度後半にかけて、身体拘束をしない看護実践につながるケースが増えた。

本研究では、A 病棟における身体拘束の状況と 2 か年の推移を明らかにし、変化の要因と捉えたカンファレンスの内容に着目し実践を振り返る。加えて、結果を基に、身体拘束に至る状況や身体拘束解除に至るプロセスを考察し、身体拘束をしないケアにつなげる。

研究の目的

A 病棟における身体拘束の状況と 2 か年の推移を明らかにし、変化の要因と捉えたカンファレンスの内容に着目し実践を振り返る

研究方法

1) 研究デザイン

実践報告

2) 研究期間

倫理審査承認後から 2025 年 11 月末まで

3) データの収集方法・内容・手順

(1) データ抽出の対象者

2023 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの期間に A 病棟に入院していた患者の中で、認知症ケア加算Ⅲを算定していた患者のうち、何らかの身体拘束を行い、減算となった患者

(2) データの分析内容・手順

①対象者の年齢/性別/認知症ケア加算のうち、減算となった日数/身体拘束の内容、身体拘束解除に至る経過/等を診療録から後方視的に抽出し、年度毎に比較する

②対象期間内で実施した看護カンファレンスの検討内容を振り返り、看護カンファレンスが身体拘束の実践に及ぼした影響について考察する。

倫理的配慮

本研究は、袋井市立聖隷袋井市民病院倫理委員会の承認を得て実施する。収集したデータは、本研究以外で使用しない。研究で収集した全ての紙媒体及び電子データはデータ収集を行った順に ID 化し個人が特定できないよう匿名化を行う。データの抽出から分析の過程でインターネットに接続可能なパーソナルコンピューター上には保存せず、パスワードロックをかけた USB メモリに保存する。データは院外に持ち出さない。保管は、院内の施錠可能な場所で研究終了後 10 年間厳重に保管し、その後、電子データは媒体から完全に削除し、紙媒体はシュレッダー処理により粉碎する。

【倫理研修】 渡邊真智子：APRIN RCR/HSR 受講済（＃AP0000158766 西暦 2019 年 1 月 21 日修了）

渡邊真智子：日本学術振興会研究倫理 e ラーニングコース受講済(西暦 2024 年 2 月 18 日修了)

同意書の手続き

本研究は診療録を用いた調査研究であるため、研究対象者から文書あるいは口頭による同意取得は行わない。但し、人を対象とする医学系研究に関する倫理指標で示されている「インフォームドコンセントを受けない場合において当該研究の実施について公開すべき事項」の公開と、研究対象者へ、研究参加拒否の機会を与えるため、オプトアウトについての資料を提示する。

結果の公表予定

本研究で得られた結果は、第 33 回日本慢性期医療学会で報告することを予定している

引用・参考文献

- (1) 小橋川由美子,田中正一(2018).回復期リハビリテーション病棟での身体抑制による転倒予防効果.日本職業・災害医学会会誌,66,111-116.
- (2) 安ヶ平才広,鳥谷部江理香,野里同(2023).回復期リハビリテーション病棟での身体抑制に対する認識調査－看護師とセラピストの認識の違いを比較して－.岩手医科大学看護学部紀要.1,51-56.
- (3) 厚生労働省保険局医療課.令和 6 年度診療報酬改定の概要 重点分野Ⅱ（認知症、精神医療、難病患者に対する医療）. <https://www.mhlw.go.jp/content/12400000/001238907.pdf>